

鑑賞学実践研究 16 — ジョット作《哀哭》 —

吉川 登・松永拓己

Case studies in the Appreciation-ology of Art 16 — Giotto's “Il Compianto su Cristo Morto” —

Noboru YOSHIKAWA, Takumi MATSUNAGA

(Received October 1, 2007)

1 はじめに：ジョット作《哀哭》のスキプト

本鑑賞授業実践は，中学校高学年（中学2～3年生）を対象にした教材開発とその授業実践結果の分析を内容としている。

鑑賞課題作品として，ジョット作《哀哭》（図1，14世紀初頃制作，パドヴァ，スクロヴェーニ礼拝堂壁画）を選んだ（注1）。イタリア・ルネサンス美術の先駆者であるジョットは，パドヴァ，スクロヴェーニ礼拝堂におけるフレスコ画連作（マリアの生涯およびキリストの受難をテーマとする）によって自身の芸術様式を確立した。その作風は，中世美術の概念を乗り越え，ルネサンスおよびそれ以降の近代美術への地平を開く革新的なものであった。スクロヴェーニ礼拝堂壁画の中であって，本実践で取り上げる《哀哭》は，その雄渾な劇的表現によってひととき名作の誉れ高く，古来多くの人々の心を魅了し続けてきた。美術史的な重要性を有し，かつ芸術的に高い水準を示す，このようなジョットの作品を鑑賞することは，中学生にとって極めて有意義であると考えられる。

鑑賞授業を成功させるためには，授業企画者（吉川）と授業実践者（松永）が，鑑賞課題作品について基本的見解を共有しておかねばならない。この授業の発案者である筆者（吉川）によって作成された基本的見解を，われわれはスキプトと呼んでいる。以下の記述は，スキプトの内容である。

「哀哭」（Lamentation）とは，キリスト伝の物語的脈絡において，十字架から降ろされたキリストが，その痛ましい・無力な姿を，悲しみにくれるマリアや多くの弟子たちの前に晒す，という場面を描くもので，キリストの生涯の中で最も悲惨で・人間的な側面を露わにする局面の絵画化ということ課題としている。

画面（図1）は比較的浅い空間の中で展開する。それは自然界の一隅を描いたもの，つまり現実描写とい



図1 ジョット《哀哭》

うよりもむしろ，舞台空間を想起させさせる。この絵の大きな特徴となっている「斜めに走る岩山」にしてもそうだ。それはまるで，舞台の大道具のようである。さらに，この「舞台」上でイエスの死を嘆く人物たちの振る舞いも，やや演劇的に脚色されたもののように見える。パノフスキーは，ドゥッチョの芸術を叙情詩的と述べる一方，「ジョットの芸術は叙事詩的あるいは演劇的である」と述べている（注2）。おそらく，ジョットは，平面でしかない絵画に空間のイリュージョンを導入する必要に迫られたとき，「自然」から出発するのではなく，「舞台」から着想したのではないだろうか？ というのも，自然は切れ目なく続く連続した光景としてわれわれの前に茫漠と広がっており，それを画面内に直接「空間」として構成するにはあまりにもとらえどころがなかったにちがいない。自然の「空間」を画面内に捕らえ・閉じ込めるためには，人工の枠組み＝舞台が必要であったに違いない。

このような「舞台としての画面」において，画枠は

きわめて重要な意味を持つ。下枠は舞台面、すなわち人物が立つ「地面」を意味し、上枠は天井、すなわち「上空」を意味し、画面左右の枠は「出入り口」、すなわち楽屋と舞台を区切る「境界」を意味することになる。ジョットの描く人物群は、左右の出入り口からそれぞれ舞台上に上がり、舞台（＝画面）中央を向いていることが多い。このような人物構成法も、演劇から着想されたものと思われる。そして、スクロヴェーニ礼拝堂壁画の中で、最も「演劇的」ないしは「劇的」な場面の一つが《哀哭》であり、「古典主義者ジョットと表裏一体をなす表現主義者ジョットの顔が、これほど端的に示されている場面は見当たらない」（注3）と評されるほどである。

画面は大きく上下の二つの領域に分けられる。下部、すなわち「舞台上の」人物群は、それぞれの仕方で、キリストの死を嘆き悲しんでいる。画面右から見ると、茫然とたたずむ二人の男がいる。この二人物は、「キリストの遺体を十字架から降ろしたニコデモと、キリストを埋葬したアリマタヤのヨセフである」（注4）とされている。これら二人の人物は、静かな悲しみの中に、深い失意と無力感を漂わせている。

この二人の足元にうずくまり、キリストの足を触っている女がいる。これは通常、マグダラのマリアとされている。この絵のすべての人物の中で、最もあでやかで最も鮮やかな色彩を与えられているのは、この人物である。マグダラのマリアは、主の足の甲に印された痛々しい傷口を見つめながら、昂ぶりつつある悲嘆の感情をかるうじて抑制しているかに見える。マグダラのマリアの姿勢は、右の二人と画面中央の群像を連結する機能を持っているように感じられる。

マグダラのマリアの「抑制された悲嘆」は、画面中央において、一気に爆発する。画面中央の劇は横顔で描かれた二人の人物によって演じられている。一人は聖ヨハネで、彼は「自身を象徴する鷲のように両腕を後方に広げて」（注5）激しく嘆いている。もう一人は、十字架上のキリストを目撃したクロパの妻マリアとされており、彼女はキリストの手首を取って、しみじみとした悲しみをかみしめている。この二人はともに死せるキリストの方向に向けられた横顔で描かれており、この横顔の反復的描写はキリストの死に対する情緒的反応を倍加する効果を生み出している。そして、二人の悲嘆の情動は、画面左のキリストとマリアの頭部へと巧みに導かれていくのである。

この絵の中心人物であるキリストは、横たわる姿をとっているために、その頭部は画面左隅へと押しやられている。しかし、すべての人物の意識と視線がキリストの頭部に集まるかのような巧妙な構図を用いることによって、ジョットは驚くべき集中性を画面に与え

た。まず、背中向きに座る2人物は、黒子のようにキリストとマリアの上半身を取り囲み、自らは目立たず、ドラマの主人公であるキリストとマリアを際立たせる。つぎに、左端に立つ複数の人物のすべては、上から覆いかぶさるように、キリストとマリアを注視している。第三に、キリストを抱き支える聖母マリアの横顔は、聖ヨハネとクロパの妻の横顔を反復することにより、彼らの悲嘆を受け継ぎ、強化するという造形的効果を生み出している。第四に、両手を合わせて頬に当てている女性は、キリストとマリアの上半身の背後に垂直に立つことによって、真の主題のある場所を、まるで一里塚のように指し示している。この人物の頭部は、二人の「黒子」を底辺とする三角形の頂点に位置しているのだ。

左端の両腕を広げている女性は、聖ヨハネの身振りと対応する身振りで示され、いわば彼の鏡像の分身のように見えるのであるが、それが誰なのか不明である。この絵画には、聖者であることを示す頭光を有している人物は全部で8人描かれているが、この人物だけがいまだに謎である（これを「女性A」と呼ぶ）。

画面上部に眼を向けよう。そこには、青の「地」に天使が群れ飛んでいる。神の永遠を意味する「金地」を、より自然な「天空」を感じさせる「青」に変えることによって、ジョットは画面上部の自然な位置関係、すなわち「上空」であることを明確に示そうとしたに違いない。この「上空」には10人の小天使がそれぞれの嘆きを多様に表現して飛び交っているが、彼らの嘆きはより直截的で、子供のように純真であるように感じられる。画面下部の人物は重々しい「肉体」の中に「魂」を閉じ込めているが、画面上部の天使たちは、肉体を持たぬ透明な存在であり、「魂」の純粋な形象化である。画面下部と画面上部では、「嘆き」の音質と声部が異なるのだ。この絵は、まるでポリフォニー音楽のように、多重声部を同時に響かせているのである。

しかし、それらの異なる多数の「声」を束ね、力強い主導的旋律で一定方向へと方位づける造形的要素がある。それは、まるで画面上部と下部とを分割するかのように描かれている「斜めに走る岩山」の描写である。「斜線」それ自体は中立的な線であるが、この岩山の「斜線」は、聖ヨハネの「下向きの横顔」と交差することによって、明らかに「下降」のベクトルを獲得している。そのベクトルの始点は「枯木」（受難死・復活の象徴）にあり、その終点は「キリストの頭部」にある。

G. シラーによれば、ジョット以前のイタリアにおける「哀哭」表現には、二つのタイプが存在したという（注6）。一つは、塗油板もしくは石棺上にマリア

が座って、キリストの上半身を膝の上に乗せるというものであり（聖フランチェスコの画家《哀哭》，1265～70）（図2），もう一つは、塗油板もしくは石棺上に横たわるキリストの枕辺でマリアが嘆く，というタイプである（作者不明《哀哭》，1280～90）（図3）。



図2 《哀哭》



図3 《哀哭》

これら2作品と比べて，ジョットは先行者の着想から何を継承し，何を捨て，何を新たに創出したのであろうか？

まず，ジョットは塗油板もしくは石棺を捨て，代わりに「黒子」を描き加えた。しかし，キリストをマリアの膝の上に置くという「図2」のタイプを継承している。このことによって，ジョットは，キリストの誕生の場面（図4）と死の場面（図5）を，予言的に結びつけたのだと言えるかも知れない。誕生のキリストと死せるキリストが同様の「抱き方」で示されることによって，キリストの地上での運命が電光のように鑑賞者に伝えられるのである。



図4 《降誕》部分



図5 《哀哭》部分

つぎに，ジョットは，「図3」のタイプにおける「両腕を大きく広げて嘆く人」を，修正を加えて取り入れたと考えられる。女性Aや聖ヨハネの独創的な形象はこうして生まれた。ジョットの修正は，大げさで陳腐な感情表現を，激しいけれども抑制の効いた品位のあるものへと変貌させたのである。

「図2」にも「図3」にも，画面下部と上部の対位法は見られず，「肉体」を持つ人間の重さと小天使たちの軽さとの対比は見られない。そして，何よりも，画面全体の情動を一方向へと方位付ける岩山に類する表

現は存在しない。これらのモチーフは，まさにジョットの案出した天才的な着想と言うべきである。

最後に，女性Aの問題について考えてみよう。「図2」において，マリアのすぐ後ろには，三人の女性がひとかたまりになっているのが見える。これら三人の女性は，ビザンチン美術の古類型にも認められる（作者不明《哀哭》，11世紀）（図6）。おそらくジョットは，この伝統を採用し，三人の女性を，「マグダラのマリア」「クロパのマリア」「女性A」として，ひとかたまりではなく，劇的演出法の観点から，分散させて，かつ多様な姿勢において，表現することにしたのであろう。すなわち，「マグダラのマリア」は坐像，「クロパのマリア」は中腰，「女性A」は立像で，という風に人物像の「高さ」が段階的に違えて表現されているのだ。そして，これら三人の頭部を結び付ける「線」は，ちょうど「岩山」の下降線と交差する角度で「上昇」しているのである。なんと卓抜した幾何学が隠されていることか！



図6 ビザンチン美術《哀哭》

とすれば，「女性A」も，マリアという名で呼ばれる人物として，ここに登場しているのではなかろうか？おそらく，キリストの墓が空であったことを見届けることによって，キリストの復活の証人となったあの「三人のマリア」（注7）の一人として，「女性A」を同定すべきなのであろうか？だとすれば，「哀哭」の場面に，すでに「復活」が予告されている，ということになるだろう。

2 鑑賞授業の展開：鑑賞授業《哀哭》のシナリオ

《哀哭》に関する基本的見解（＝スクリプト）に基づいて，具体的な授業展開に沿って発問や説明を組み合わせたものを，われわれはシナリオと読んでいる。授業企画者（吉川）によって作成されたシナリオは，以下のとおりである。

ジョット《哀哭》：シナリオ

発問1 この絵を最初に見て、どんな印象を受けますか？

発問2 これはどんな場面を描いた絵だと思いますか？

説明1 「哀哭」とは、声を上げて悲しみ泣くこと（『広辞苑』）。キリスト伝の物語の中での《哀哭》の場面とは、死せるキリストを取り巻いて、聖母マリアをはじめ多くの弟子たちがキリストの死を嘆き・悲しむ情景を表現したものです。《哀哭》は、「キリストの受難」の物語の中で、最も高潮した場面の一つです。「キリストの受難」とは、《キリストのエルサレム入城》から《キリストの埋葬》までの諸場面を指します。以下はそのうちの代表的場面です（パワーポイントで画像を見せる）。

ドゥッチョ《キリストのエルサレム入城》—キリストと弟子たちはエルサレムに入る。

ギランダイオ《最後の晩餐》—死を予期したキリストは弟子たちに最後の別れを告げる。

カラヴァッジョ《キリストの鞭打ち》—捕らえられたキリストは拷問を受ける

マンテーニャ《キリストの磔刑》—キリストは二人の盗賊とともに磔の刑に処せられる。

ティツィアーノ《キリストの埋葬》—キリストの遺体は布に巻かれて、石棺まで運ばれる。

発問3 前景の人物群に注目してください。キリストの死に対する人々の反応は、どのように描かれていますか？

発問4 空中の天使に注目してください。キリストの死に対する天使たちの反応は、どのように描かれていますか？

発問5 斜めに走る岩山は、どのような効果を持っていると思いますか？

説明2 ジョット芸術の特徴について説明する。

- ① ジョット《キリストの磔刑》—重々しく垂れ下がる、物理的身体をはじめ描いた
- ② ジョット《エジプトへの逃避》—背景の岩山をたくみに用い、聖母の堂々たる姿を強調
- ③ ジョット《キリストのエルサレム入城》—画面の両側で人物を向き合わせ、対話するような効果を生む
- ④ ジョット《ユダの接吻》—画面の中央でキリストとユダを対決させ、キリストの逮捕を簡潔かつ劇的に描いた

発問6 《哀哭》の登場人物の中で、頭光を持つ者は聖者です。これらの聖者たちの中で、一人だけ名前が分かりません。謎の人物は誰だと思いますか？

説明3 ジョット《哀哭》の場面において、頭光を有

する聖者たちの名前は、右側から、キリストを十字架から降ろしたニコデモキリストを埋葬したアリマタヤのヨセフうずくまっているのはマグダラのマリア両腕を大きく広げているのはヨハネその下にいるのはマリアという名の女性画面左端の女性は誰であるか分からない—女性A
なお、岩山の上の枯木は、キリストの死を意味する象徴的表現です。

「キリストの受難」に登場する女性聖者は限られています（画像を見せながら説明する）。

ヴェロニカー十字架を運ぶキリストの額の汗を布で拭いた女性（エル・グレコ《聖ヴェロニカ》）

聖母マリア—キリストの《磔刑》の場面などに登場する（ベリーニ《磔刑》）

三人のマリア—マグダラのマリアを含む、マリアという名の他の二人の女性。この三人はキリストの墓が空になっているのを目撃し、キリストの復活を知る。

（スケドーニ《三人のマリア》）

マグダラのマリア—《我に触れるなかれ》の場面において、復活したキリストの姿を見る（ティツィアーノ《我に触れるなかれ》）

発問7 女性Aは誰だと思いますか？

説明4 ジョット以前に描かれた古いタイプの《哀哭》表現を見てみましょう。（聖フランチェスコの画家、ビザンチン絵画）

何か気がついたことはありませんか？

三人一組の女性が見えますね。

ジョットの《哀哭》にも3人の女性が描かれていました。

ただし、ジョットの描き方は、3人を分散させ、劇的に表現しています。

発問8 もしこれら3女性が、復活のテーマに関連する《三人のマリア》であるとするならば、キリストの死を描く《哀哭》の画面の中に、なぜ「三人のマリア」が描かれているのだと思いますか？

3 授業実践—ジョット作《哀哭》—

本実践の日時等のデータに関する詳細は以下の通りである。授業実践者は松永である。

日時：平成19年7月12日第3校時

場所：熊本大学附属中学校 美術教室

対象生徒：中学3年生（男子10人女子9人）計19名で、鑑賞学実践研究の授業を行うのは、はじめてである。

授業展開

まず、はじめに、これが生徒にとっては初めての鑑賞教育の授業となるので、出来るだけ自由に自分の考えを発するようにと話をを行い、一方的な受け身の鑑賞授業でなく、各生徒が主体的に読み解いていく授業となるようにした。

なお、以下の生徒の回答について、類似内容についてはまとめた記載とし、複数回答をしている生徒もその都度記載している。今回の授業ではパワーポイントを活用しプロジェクターで映像を映し、絵をしっかり見て、それぞれ意見を考えてもらい、意見を出し合い、お互いの様々な考えを聞きながら授業を進めている。

発問1) この絵を最初に見て、どんな印象をうけますか？

授業の最初に、まずジョットの《哀哭》をパワーポイントの映像とA4サイズのカラー刷りの印刷物で大きく見せている。そして《哀哭》の第1印象に関して質問した。

生徒の回答

■「悲しそう」という回答が14名(73.7%)であり、大部分の印象を占める。また、「明るい」という印象を述べる人も5名(26.3%)おり、悲しみの場面であるが、色使いの明るさを感じているようである。

発問2) これはどんな場面を描いた絵だと思いますか？

生徒の回答

■「死の場面」と19名全員が回答した(100%)。人が横たわり、周囲に大勢の人が嘆き悲しみ、天使も悲しんでいるところから判断して、イメージ解釈を行っているようだ。

このほか、天国へ連れゆかれる場面であること(7名)や、キリストの死の場面であること(6名)を記述する人も3分の1ほどに及ぶ。

次に、《哀哭》の言葉の説明と、絵の説明を行った。

○「哀哭」とは、声を上げて悲しみ泣くこと(『広辞苑』)。

○キリスト伝の物語の中での《哀哭》の場面とは、死せるキリストを取り巻いて、聖母マリアをはじめ、多くの弟子たちがキリストの死を嘆き悲しむ情景を表現したもの。

○《哀哭》は、「キリストの受難」の物語の中で、もっとも高潮した場面の一つ。

○「キリストの受難」とは、《キリストのエルサレム入城》から《キリストの埋葬》までの諸場面を指す。次に、5名の作家の作品を見せ、「キリストの受難」について、以下の説明をおこなった。

図7 ドゥッチョ 《キリストのエルサレム入城》

キリストと弟子たちはエルサレムに入る

図8 ギランダイオ 《最後の晩餐》

死を予期したキリストは弟子たちに最後の別れを告げる



図7



図8

図9 カラヴァッジョ 《キリストの鞭打》

捕らえられたキリストは拷問を受ける

図10 マンテーニャ 《キリストの磔刑》

キリストは2人の盗賊とともに磔の刑に処される



図9



図10

図11 ティツィアーノ 《キリストの埋葬》

キリストの遺体は布に巻かれて、石棺まで運ばれる。



図11

発問3) 前景の人物群に注目してください。キリストの死に対する人々の反応は、どのように描かれていますか？

■19名全員、人々が悲しんでいることを回答した(100%)。ただし、同時に、悲しんでいるように見えない人々もいることを指摘している者も8名(42%)おり、人物の描き方が、非常に多彩であることを感じているようである。

発問4) 空中の天使に注目してください。キリストの死に対する天使たちの反応はどのように描かれていますか？

■悲しみ、とまどい、うちひしがれていることを全員が指摘している(100%)。ただし、表情はそれぞれ特徴があり、人物群と同じように多彩な描き方がなされており、6名(31%)がそれぞれの天使が個性的に反応し描かれている様子を指摘した。そのことは、人物表現と同様である。

発問5) 斜めに走る岩山は、どのような効果を持っていると思いますか？

この回答については、多様であり、様々な解釈をしている。(複数回答)

- さびしさを表す。・・・9名(47.4%)
- 天に昇っていく道・階段。・・・5名(26.4%)
- 人々の心を表す。・・・4名(21%)
- 遠近感。・・・3名(15.8%)
- 悲しさ。・・・3名(15.8%)
- 絶望感。・・・2名(10.5%)

以下各人の個別の感想である。

- 喪失感を表している。
- 明部と暗部を分けている。
- キリストの頭と岩山が重なるので、人生の終わり(下り)を象徴している。
- どん底の気持ちの落ち込み。
- キリストが歩んできた道を象徴。
- 飾り気がない。

ここまでの発問で、この作品を細部まで観察させることに及んだ。人物、天使、背景と細かく観て、各人で考えてきた。

次に、ジョット芸術について説明を行った。《哀哭》に関連する、4枚の作品をプロジェクター映像で見せ、作品の解説を行い、ジョット芸術の特徴を述べた。

図12《キリストの磔刑》

重々しく垂れ下がる、物理的身体をはじめ描いた。

図13《エジプトへの逃避》

背景の岩山をたくみに用い、聖母の堂々たる姿を強調

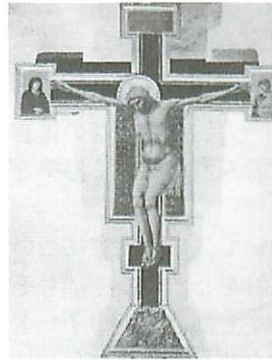


図12



図13

図14《キリストのエルサレム入城》

画面の両側で人物を向き合わせ、対話するような効果を生む

図15《ユダの接吻》

画面の中央でキリストとユダを対決させ、キリストの逮捕を簡潔かつ劇的に描いた

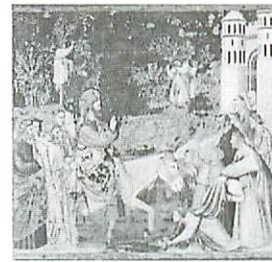


図14



図15

次に、この《哀哭》の中の謎に視点を移し、各人の推理を促した。

発問6) 《哀哭》の登場人物の中で、頭光を持つ者は聖者です。これらの聖者たちの中で、一人だけ名前が分かりません。謎の人物は誰だと思いますか？(右から何番目と教えてください)

この推理については、単純に直感で回答してもらった。まず、遊びとして絵を推理して楽しんでもらった。

この後、名前のはっきりしている人物を教えた。以下その説明である。

○この絵において、頭光を有する聖者たちの名前は、右側から、

- ①キリストを十字架から降ろしたニコデモ
- ②キリストを埋葬したアリマタヤのヨセフ
- ③うずくまっているのはマグダラのマリア
- ④両腕を大きく広げているのはヨハネ
- ⑤その下にいるのはマリアという名の女性
- ⑥画面左端の女性は誰であるか分からない(女性)

A)

よって、左端の女性は誰であるかを考えさせることとし、この話に登場する女性の中から可能性のある人物4名を説明した。

○「キリストの受難」に登場する女性聖者は限られています。

- ①ヴェロニカ
- ②聖母マリア
- ③マグダラのマリア
- ④ 3人のマリア (マグダラのマリアを含む)

そして、ジョット以外の画家の描いたそれぞれの人物像を見せ、①~④の人物達のキリストとの関わりを説明した。

- ① について (図16)・・・エル・グレコ作《聖ヴェロニカ》 十字架を運ぶキリストの額の汗を拭いた女性
- ②について (図17)・・・ベリーニ作《磔刑》 聖母マリアはキリストの死の場面に登場する



図 16



図 17

- ③について (図18)・・・ティツィアーノ作《我に触れるなかれ》
マグダラのマリアは復活したキリストの姿を見て近寄ろうとするが、拒まれる。



図 18

④について (図19)・・・スケドーニ《3人のマリア》

マグダラのマリアを含むマリアという名の3人の女性。この3人はキリストの墓が空になっているのを目撃し、キリストの復活を知る。



図 19

発問7) 女性Aは誰だと思いますか。
回答は大きく2つに分かれた。

- ①ヴェロニカ・・・・・・・・・・12名 (63%)
- ②聖母マリア・・・・・・・・・・ 0名
- ③マグダラのマリア・・・・・・ 0名
- ④ 3人のマリア (マグダラのマリアを含む)
・・・・・・・・ 6名 (31.6%)
- ⑤不明・・・・・・・・・・1名 (5.3%)

ここでは、まだ、登場していないヴェロニカの可能性を回答する人が多かった。聖母マリアも、マグダラのマリアもすでに画面の中におり、挙げるものは無かった。あとは、3人のマリアという謎の群像に可能性を挙げる人が3割に及んだ。

この後、さらに、別の作品を見せ、キリストとマリア達の関連を推測させた。ジョット以前に描かれた古いタイプの2枚の《哀哭》を提示した。

- ① 聖フランチェスコの画家《哀哭》1265～70 (図2)
- ② 作者不明、ビザンチン美術《哀哭》11世紀終わり頃 (図6)

この2枚の作品では、いずれも3人が一塊でキリストの死の場面に立ち会っている。そして、この3人のマリアが「キリストの復活」に立ち会うことになる前段の説明を再度説明した。そして、最終の発問へと移った。

発問8) もしこれら3女性が、復活のテーマに関連する《3人のマリア》であるとするならば、キリストの死を描く《哀哭》の画面の中に、なぜ「3人のマリア」が描かれているのだと思いますか。

ここでは、仮定を提示し、それに沿って推理をしてもらった。ジョットの《哀哭》では、3人のマリアは

以前の絵画と違いバラバラに描かれていると仮定。つまり、3人のマリアがこの作品の中にも登場し、それはその後のキリストの復活を見届ける3人と同じ人物たちであり、そのことをどう考えるのかを回答してもらった。以下、全回答を挙げる。

- いなければならぬ存在だから、キリストの存在を強調させるため。
- キリストが好きだった。
- キリストへの愛
- これからキリストが復活することを示すため。(12名が回答)
- 3人のマリアの内一人が歩くキリストを目撃することになるから。
- 亡くなったことを3人のマリアに見せ、復活したことをより強調したいため。(死を見届けた)3人のマリアが「復活した」と言った方が説得力が増すため。
- 岩山は右上がりて天へ続く道であり(頂点の)枯れ木がキリストの死を予測している。それと対比させ、3人のマリアを位置的に線で結ぶと右下がりの線であり、キリストが地に復活(生き返る)ことを見えない線で予測させている。
- キリストとの関係が深い人物達の印象を強くするため。
- キリストにとっての重要な存在
- 死の場面でも、復活できる希望を忘れないように。キリストの復活にかかわることを何らかの形で回答している人が15名で、7割を超える生徒が死と復活の関係を推理している。

多くの生徒が「悲しそう」という印象で始まったこの鑑賞の授業は、「死と復活」の繋がりを予感して結ぶことになった。

最後にこの作品の制作技法、展示場所などを注釈し、授業を終了した。

本実践のまとめ

この授業の中で思いも掛けず、深くジョットの人物の描き方、空間の作り方に言及する人もおり、作品をよく見て考えることが実践されていることが窺える。

今回は、キリストについての背景をよく知らねば充分推理も働かず、したがって、画面に封じられていると思われる作者の意図も生徒に届きにくい。しかし、段階を追った説明と問いかけがあって様々な思考を働かせ、知識を会得しさらに洞察することを楽しんでくれたようである。

4 おわりに

本鑑賞学実践研究は、中学生には比較的なじみのないプロト・ルネサンス美術を題材として取り上げたので、「説明」の部分が多めに導入した。「説明」は主に、「キリストの受難物語」に関するものと「ジョット芸術の特色」に関するもので、いずれも簡単な説明文を入れた画像を多用し、眼と耳の両方から情報を正確に理解できるよう、配慮した。

本授業では、鑑賞課題作品であるジョット《哀哭》を「見る」ことから始まって、「説明」によって得られる知識(=「知る」)を吸収した上で、画面に含まれている謎を解く(=「考える」)という一連の鑑賞行為の展開を想定しているが、生徒の回答例を見る限り、この想定は見事に実現したといえる。

生徒の回答例は論理的であると同時に想像力に富み、ジョット作《哀哭》の真髄に触れていることを感じさせる。以下、筆者(吉川)が目にした会と例をいくつか挙げてみよう。

「発問5」(斜めに走る岩山の効果について問うもの)に対する回答で、斜めの岩山が「人々の心を表す」というものがあつた。これに関連する回答として、「寂しさを表す」「喪失感を表している」「どん底の気持ちの落ち込み」を上げることができるだろう。すなわち、生徒は、背景の処理を前景の悲劇と関連付けて鑑賞しているのである。これは、ジョット美術に対する妥当なアプローチであると言える。

また、同じ「発問5」の回答例に、岩山は「天に昇っていく道・階段」であるとするものがあつた。これと関連する回答例としては、「キリストの歩んできた道を象徴」「キリストの頭と岩山が重なるので、人生の終わりを象徴している」があるが、背景と前景の関係を情緒的な段階から一歩進んで象徴的な段階での関係としてより深く解釈したものであると言える。岩山を「階段」と翻訳する想像力は秀逸である。

「発問8」(キリストの死の場面になぜ3人のマリアが登場するのかを推理させる)の回答も、予想以上の内容が得られた。「これからキリストが復活することを示すため」という、キリストの死と復活を結びつけた回答が主流である。その中であつて、「亡くなったことを3人のマリアに見せ、復活したことをより強調したいため。(死を見届けた)3人のマリアが「復活した」と言った方が説得力が増すため」という回答例は、受難死と復活の論理的整合性に着目して絵画を読み解こうとしたものである。一方、「岩山は右上がりて天へ続く道であり(頂点の)枯れ木がキリストの死を予測している。それと対比させ、3人のマリアを位置的

に線で結ぶと右下がりの線であり、キリストが地に復活（生き返る）ことを見えない線で予測させている」という驚くべき回答は、受難死と復活の論理を絵画の構成原理そのものの中に読み取ろうとするもので、極めて創造的な読解である。

これらの優れた回答例は、注意深い観察と絵画に対する共感、そしてイメージを媒介にした論理的思考によるものであり、要するに、「見る」「知る」「考える」という鑑賞行為の一連の過程を順序良くたどったことによって生まれたものであると確信する。

注

- 1) 制作年については諸説がある。「上限が定礎式の間われた1303年、下限が1312～13年頃」とされる。『カンヴァス版世界の大家1：ジョット』、中央公論社、1985年、81-82頁。
- 2) E. パノフスキー『ルネサンスの春』（中森義宗・清水忠訳）、思索社、1976年、139頁。
- 3) 『世界美術大全集：ゴシック2』、小学館、1994年、363頁。
- 4) 同上
- 5) 『カンヴァス版世界の大家1：ジョット』、中央公論社、1985年、86頁。
- 6) G.Schiller, *Iconography of Christian Art*, vol.2, Lund Humphries London, p.174-179.
- 7) 諸川春樹、『西洋絵画の主題物語：聖書編』、美術出版社、147頁。